

短裙みじかすその婦人達も夫君を伴つてか、伴はれてか、二三は見えて、番を待つ間を絹の靴下に包んだ脛を重ねて、壁際の椅子に凭つて居る。スチーブも通らぬ此の俱樂部ではさゝやかなストーヴの一つや二つでは、待合の室の十分に温まる譯はないのだから、これが西洋人だつたら爐邊は勿論婦人達の占有に歸するのだが、そこはモーニングでも短裙でも、もともと日本人許りの集合なのだから、是非これにと招する程のギャラントリーを示す男も無く、進んで追立てを喰はす程の婦權を發揮する婦人もなく、そこには今食つて來た雑煮の不味さを惡口する連中や、今日の午後を如何に正月的に過ごそうかといふやうなことを相談する手合などが、踏んぞり返つて居る。西洋人が見たら、素姓は争はれぬといふだらう、尤も見られる前に、女は爐邊に行つて編物でもいぢくるだらうし、男は女の椅子の後に身體を折りかゞめて凭りかゝるだらうが。

兎も角も雑煮は不味かつた、生乾きの搔餅と、浸し物の残りを微温湯にぶち込んで、醤油を少しうちかけて、ぐるぐると搔きまはしたものに過ぎぬ。^{自家の}近所の餅屋の黒が時々頂戴してゐる奴の方が遙に雑煮らしい。それでも此の以外には、巴里中鐘太鼓で搜しても、所謂雑煮を調達して喰はす家はないのだから、何とも致し方ない。『だから雑煮は嫌ひだと初めからいつたのだよ』などゝ下らぬ不平を並べながら、遊びに来るといふ五六人と共に家に歸つた。正月だ、カルタを取らうといふものがあり、トランプをやらうといふものもあつたが、女中の持ち出した酒など飲んで居る中に、何もやらぬことになつてしまつた。國の連中に新年状を出すのだなどゝ、殊勝なことをいうて葉書を買ひ込んで來たのもあつたが、二月半過ぎに新年お目出度うもあるまいと、誰やらが邪魔をいたので、二三枚書いたのまで引きちぎつてしまつたのもあつた。